

山田えみこ

(本名・山田江美子)

「これがあれば、
いつか会える」

【人物一覧表】

小金井 美久（2／7／12／15／18／35）

小説家を目指す少女

小金井 佳介（42／47／52／55／58／75）

掃除夫

小金井 敦子（38／43／51／54／71） 専業

主婦

森井 卓（48） 共栄クリエイティブスタジ

オ代表

サラリーマン

クラスメイト A

クラスメイト B

クラスメイト C

クラスメイト D

介護士

事務員

入居者 A

入居者 A の家族

進行役

【あらすじ】

小金井美久は、2歳半にして字を覚え、書き始める、才能を感じさせる少女。その父は、中卒の、かつてボクサーを目指した小金井佳介、今は掃除夫だった。

常々、学歴の無さで馬鹿にされることの多い佳介は、美久の出世で、社会に見返すことを夢見る。それだけ、美久には期待大だった。

しかし、美久は、期待通りには育たない。小説を書くことの好きな美久は、やがて、父の期待に反して、大学には入らず、小説家の道を志すように。

親子喧嘩をし、家を飛び出した美久は、家には戻らなくなった。

歳をとり、痴呆症を発症した佳介は、老人ホームに入れられるが、美久が、それを察して帰ってくる。

美久は、小説のネタの入ったメモ帳をみせて、佳介と語らうが、佳介は、それを持っていれば、美久に会えると思い、隠してしまう。

○小金井家・居間

日本風の古い家屋の居間。

畳の間の中央にちゃぶ台がしつらえられ、そのちゃぶ台を使って小金井美久（2）が、画用紙にクレヨンを走らせている。

後ろで台所が居間に続いて見え、小金井敦子（38）が、鼻歌を歌いながら、勝手仕事を終え、居間に入ってくる。美久が、クレヨンでなにか書いているのをみとめ、

敦子「美久、何しているの？」

美久「んー、『字』を書いているの」

敦子が、ちゃぶ台の上のスケッチブックを見ると、「こがねいみく」や、「こがねいけいすけ」などの字が見える。

敦子、びっくりし、

敦子「これ、美久ちゃんが書いたの!!」

美久「うん」

敦子、そのスケッチブックを持ち上げ、

まじまじと見つめる。

○明和ビル・階段

日に焼けた顔の小金井佳介（42）が、
モップ掛けをしている。

○同・廊下

佳介が、モップ掛けをしていると、脇
をサラリーマンの集団が通り過ぎる。

サラリーマン「なんだ？掃除夫。新入りか？」

佳介「よろしくお願いします」

サラリーマン「へん、なんだ？」

と、佳介を上から下まで、まじまじと
見つめ、

サラリーマン「せいぜい、よろしくな」

サラリーマンたちは、せせら笑いなが
ら、通り過ぎていく。

佳介は、無表情でサラリーマンたちを
見送る。

○小金井家・居間（夜）

庭に通じる引き戸が開け放されている。

秋の虫の音がする。

佳介が、茶碗の飯をかき込んでいる。

食べながら、佳介、

佳介「美久が？」

佳介の日に焼けた顔に、汗が流れる。

敦子「そうなの。ケイちゃん。まだ、2歳半

なのに」

佳介「字を書いたのか？」

敦子「ええ」

佳介「ふーん」

敦子「まだ、近所の子も書けないのに」

佳介「将来、いいところに入れるかもしれない

な」

敦子「明日、幼稚園のお母さんに聞いてみよ

う。字の書ける子がいるかどうか」

佳介「たいしたもんだよ」

敦子「もともと、絵本をみて、じーっとして

いる子だったけど」

佳介「俺は、中学しか行かなかった。美久には、十分な教育を受けさせたい」

敦子「ケイちゃんは、ボクサーになろうとしてたから」

佳介「親も俺のこと、『バカだ』、『バカだ』言ってたからな」

佳介、茶碗が空になると、箸を投げ出す。

佳介「どいつも、こいつも、バカにしてる」

佳介、乱暴に立ち上がると、居間から奥のほうへと、出ていこうとする。

佳介「風呂、湧いてるか？」

敦子「はい、湧いてるよ」

佳介、居間から出ていく。

○同・廊下（夜）

風呂場から、廊下に佳介の鼻歌が聞こえている。

美久が、風呂場が続く洗面所の引き戸を開けて、にこにこいたずらっぽく

覗き込んでいる。

引き戸の向こう側に、佳介が、ご機嫌で風呂に入っている。

佳介、美久が覗き込んでいるのに気づき、笑って、美久にお湯をかける。

美久は、嬉しそうに悲鳴を上げながら逃げていく。

ばたばたと、廊下を走っていく美久。

敦子が、みつけて、バスタオルを取り出し、追いかけていく。

敦子「美久、濡れてる！風邪ひく！」

美久「きゃっ、きゃっ」

美久は、はしやいで逃げていく。

佳介は、廊下で鬼ごっこをしている敦子と美久の足音と声を聞きながら、幸せそうに微笑んでいる。

○香川小学校

「平成7年度香川小学校入学式」という立て看板の横で、小金井敦子（43）

と、小金井美久（7）が、盛装して微笑んでいる。

それを、小金井佳介（47）は写真に幸せそうに撮っている。

佳介「さて、末は博士か大臣か」

シャッターを押し、美久と敦子に手を振る佳介。

○同・教室

美久が、机に向かい、ノートを広げ、挙手している。

O・L

挙手している小金井美久（12）。

○香川小学校・教室

T・6年後 美久 小学6年生

授業中で、生徒たちが座っている。

美久、机に向かい、ノートになにかを一生懸命書いている。

教壇の上で、教師がテストを返してい

る。

教師「芥田さん、80点。井川さん、78点…

…」

後ろにいる、クラスメイトAに小突かれて、美久が振り返る。

クラスメイトA「おまえ、なに書いてんだ？」

美久、少しぶっきらぼうに、

美久「小説」

クラスメイトA「見せるよ」

教師「江藤さん、72点。小野さん、81点…

…」

美久は、少しむくれるが、しかたなさそうにクラスメイトAにノートを見せる。

クラスメイトAは、ノートをぺらぺらとめくり、読む。

クラスメイトA「私は、2歳のころ、からかわれて、よく、お父さんに風呂に水をかけられました。…、なんだ？これ？」

教師「加納さん、もう少し頑張りましょう」

加納が、お辞儀をして答案用紙を受け取り、舌をぺろりと、教室の皆にむかっておどけて出して見せ、自分の席に帰っていく。

美久「返して」

クラスメイトA「2歳のころのことなんて、覚えてるわけない！」

美久は、クラスメイトAをにらみつける。

教師「小金井さん！小金井美久さん！」

美久「はいっ！」

美久は、立ち上がり、教壇のほうへと、駆けていく。

教師「小金井さん！今回も、国語100点です！」

読解も難しかったのに、見事ですね！」

美久「有難うございます！」

教師「記憶力もいいし、漢字も完璧！みんな、

小金井さんを、見習いませうね！」

美久以外の生徒たちは、だらしなくうなづく。

美久、教師にお辞儀をして、席にさがる。

クラスメイトA「嘘つき、ガリ勉！」

美久をクラスメイトAが、うしろから小突く。

美久、クラスメイトAを（きつ）とにらみつける。

終業のベルが鳴る。

○小金井家・美久の部屋（夜）

机に向かって、ノートになにかを書いている美久。

佳介「おう、いいか？」

振り返る美久、

美久「いいよ？」

ふすまを開けて、小金井佳介（52）が入ってくる。

佳介「おう！美久！また、100点だったんだって？」

美久が、振り向いて嬉しそうに頷く。

佳介「頑張ってるなー、お前は優秀だ！」

と、美久が何かを書いているのに気が付いて、美久のノートを見る。

佳介「何、書いてんだ？」

美久「ものがたり」

佳介「ふーん、すごいな」

美久「私が、考えたお話だよ？とつても、面白いんだよ？お父さんにも見せてあげるよ」

佳介「そうなのか、いつか見せてな」

と、佳介、笑顔。

美久、笑顔で机の引き出しを開け、

青いメモ帳を取り出す。

佳介「うーん、これは、なんだ？」

佳介、青い手帳を手渡してもらい、

美久「ネタ帳。物語のアイデアを書いておくの。もう、たくさん、面白い話を書いてあるんだよ？」

佳介「へえ」

美久と佳介、仲良くそのネタ帳の中身を見る。

ところどころ指さしてはしゃぐ。

美久「『匠のえだ』、とか言ってるね……これ、

『匠の技』の読み間違ってるね」

うんうん、と楽しそうに頷く佳介。

○青海大学附属高校・正門前

制服姿で、笑顔でカメラの前に立つ小

金井美久（15）。カメラを構えて、小金

井敦子（51）が、手を振っている。

美久が、それに応えて手を振っている。

敦子「難関突破おめでとう、美久」

美久、はにかむ。

少し離れたところで、小金井佳介（55）
が拍手している。

○明和ビル・オフィス

佳介、床をモップで、黙々と拭き続け
る。

傍らを歩き過ぎるサラリーマンたちが、
わざとバケツを倒していく。

サラリーマン「掃除夫の娘が、青海大学附属
なんて、生意気なんだよ！」

佳介が、バケツを直すのを、いじわる
そうに笑うサラリーマンたち。

サラリーマン「悔しかったら、早稲田でも、
受けてみるんだな！俺は、早稲田卒だがな」
せせら笑い、去っていく、サラリーマ
ンたち。

バケツやこぼれた水を直し続ける佳
介。

○青海大学附属高校・教室

美久が、机に向かって文庫本を読んで
いる。

うしろから、クラスメイトBが、やっ
てきて、美久に話しかける。

クラスメイトB「美久、また本読んでるの？」

美久、親しそうにクラスメイトBを振
り向き、頷く。

クラスメイトB「全く、青海大学附属、始ま

って以来の才媛が、将来は、官僚でも狙っているのかと思ったら、小説家になりたいの？」

クラスメイトC「え？小金井、ライトノベルでも書くの？」

クラスメイトD「意外に、青海高校の才媛は、恋愛小説が好きなんかい？」

クラスメイトCが、美久が読んでいる本の作者に気が付いて、

クラスメイトC「おい、ドフトエスキーだつて？」

クラスメイトD「え？やらしい小説家？」

クラスメイトB「ばか、文豪よ」

クラスメイトC、Dは、肩をすくめて去っていく。

クラスメイトB「今度、美久の書いた本、見せてね」

美久「うん」

嬉しそうに、笑顔で答える美久。

○小金井家・美久の部屋（夜）

美久は、机に向かって、ノートにペンを走らせている。

小首をかしげながら、ペンを走らせては考え込み、また小首をかしげながらまた、ペンを走らせて、熱心に書き物をしている。

本棚には、たくさんの小説や本がある。階下の勝手のほうから、敦子の声がする。

敦子の声「美久ー！ご飯よー！！早く、降りてきてー！！」

美久「はーい！」

美久は、ノートをたたんで立ち上がり、部屋から出ていく。

○同・居間（夜）

ちゃぶ台の前に座って新聞を読んでいる佳介。少し、不機嫌。

勝手のほうから、敦子が夕飯のおかず

を次々に運んできて、食事の用意をする。

廊下の引き戸を開けて、美久が入ってくる。

佳介は、イライラと新聞をめくる。新聞から顔をあげずに、

佳介「おう、美久、勉強頑張っているか？」

美久「頑張ってるよ」

と、うそぶく。ちゃぶ台の前に座り、手をあわせ、箸をとって食事を始める。

佳介「また、小説なんて、ろくでもないやつ

書いてんじゃないだろうな？」

美久「ンなんじゃない！」

佳介「怪しいな」

佳介、新聞をたたむ。箸をとって食事を始める。

敦子、席につく。

佳介「お前は、成績がいいんだ。いい大学へ行って、いい会社に行くんだ」

美久、無言で佳介をにらみつける。

佳介「なんだ！その顔は！」

佳介、足で派手にちやぶ台を蹴る。

びっくりする美久と敦子。

敦子「ケイちゃん、やめて」

ひっくり返った茶碗などを片付け、敦子、

敦子「どうしたの？ケイちゃん」

美久、不機嫌な目で、じっと佳介をみるが、佳介、美久に向かって、

佳介「お前も俺を馬鹿にするのか？」

美久「……」

美久、ちよつとかなしそうに佳介をにらんだあと、立ち上がり、居間を去る。

○同・美久の部屋（夜）

美久、机に向かって座っている。

後ろ姿で。

なにか、書き物をしている。

敦子の声「美久ちゃん、代わりの者買って

きたわよー」

美久「いらな―い」

美久、ひたすら、書き物をしている。

○街なかの道

制服姿の美久が、鞆を持って走っている。

○小金井家・門

門を開けて、美久が入っていく。

美久「ただいま！」

敦子の声「おかえり！」

美久、門を閉め、玄関の引き戸を開ける。

○同・階段

階段を駆け上がる美久。

○同・美久の部屋

美久は、部屋に入って（はっ）とする。
部屋中が荒らされている。

美久、本棚に目をやると、学校の参考書や教科書だけが残り、ほかは、ない。

美久「無い！」

ほか、カラーボックスも、確かめる。手でごそごとやり、

美久「創作関係のが、全部ない！」

机の上に、メモ用紙。

（創作関係のものは、全部処分した。

勉強に励みなさい。）

と、書いてある。

美久「お父さんの字だ……何、これー!？」

美久、その場にへたり込む。

呆然とする美久。

○隼クリエイティブ専門学校・入口

建物の入り口の壁に「隼クリエイティブ専門学校」と、文字が彫り込まれている。

小金井美久（18）が、紺のスーツを着て、大きめの新入生の花の飾りを胸に

つけ、頬を紅潮させて、建物を見つめている。

○小金井家・庭

庭から、縁側の向こうに居間が覗け、なかで、小金井佳介（58）が、怒って荒れている。

新聞紙を床に投げつけながら、

佳介「なんだ!! 美久は!!」

家屋の奥から、小金井敦子（54）の声がする。

敦子の声「ケイちゃん!」

佳介「早稲田を受けたんじゃないのか!!」

敦子の声「美久の人生だから……」

佳介「なんのために、今まで苦労して育てたと思ってるんだ!」

廊下側の引き戸で、美久が立ち尽くしている。

美久「お父さん……」

美久、居間の佳介に歩み寄る。

佳介「美久……」

佳介、ちよつと慌てる。

佳介「美久……」

少し、たじろぐ表情の佳介。

美久「なんなのよ。私は、私は、今まで……」

佳介、美久を見る。

美久「私は、私は、小説が書きたいの！私は、私で……」

佳介「美久、お前はなんにも分かってない！」

美久「父さん、みんなを見返すために、世の中を見返すために、私を育てたの？」

佳介「……」

美久「悔しいんでしょう？自分がなんにも持っていないから!!」

敦子も、奥から居間に入ってくる。

敦子「美久！」

佳介は、美久を平手打ち。

美久は、叩かれた頬を手で押さえ、呆

然とするが、佳介をにらみつける。

美久「父さんは……」

敦子「美久……」

美久「父さんは、私を愛してくれてるんだと

思ってた！」

美久の目に涙がにじむ。

佳介、呆然としている。

美久、振り返り、部屋から走り去って

いく。

敦子「美久！」

ばたばたと、敦子も追いかけて部屋を

出ていく。

○同・階段

美久、駆け上がる。

下で、敦子が美久を見上げ、叫ぶ。

敦子「美久！」

○同・美久の部屋

美久が、駆け込んできて、押し入れか

ら大きなスポーツバックを取り出し、

ダンスの中から服や荷物を詰め込む。

敦子が、慌てて美久の部屋に入ってくる。

敦子「美久……」

美久「ここを出ていく」

敦子「なにも、そこまでしなくても……」

ばたばたと、荷物をまとめる美久。

美久「私は、愛されてないのよ」

敦子「美久、そんなことない！」

敦子、おろおろとする。

美久、荷物を詰め終わって、敦子を振り返ると、

美久「私は、父さんの自慢のための子じゃない！」

美久は、敦子をすりぬけ、スポーツバックを持って部屋を出る。

○同・階段

美久が、階段を駆け下りる。

敦子の声「美久！」

○同・門前

美久が、靴をつっかけて駆けていく。

そのまま、道を走っていく。

敦子が、門から出てきて、美久が走って行ったほうをみる。

敦子「美久！」

○同・居間

佳介が、鬼気迫って叫ぶ。

佳介「（思いつ切り嘆きの声で）ほっとけえー

!!
」

○同・門前

呆然と見送る敦子。

○明和ビル・オフィス

佳介が、モップ掛けをしているが、手を止めてしまう。

うつむき、止まっていたかと思うと、宙をあおぐ。

○隼クリエイティブ専門学校・教室

美久、教室でデスクトップコンピューターの前に座り、講義を聴きながら、ノートを取っている。

先生の声「ここで、エンターキーを叩き、それから、カーソルを……」

美久、マウスを肘で机の下に落とし、マウスは、コードを付けたまま宙ぶらりんになる。

美久は、慌てて拾う。

○明和ビル・階段

佳介、手すりに雑巾をかけながら、通りかかるサラリーマンに浅くお辞儀をする。

○ファミレス・ホール

美久が、ウェイトレス姿で、トレイを持ち、食事やコップを運んでいる。

客「おーい」

美久「はい、少々お待ちください」

美久、バランスを崩して持っていたト
レーを倒す。

○明和ビル・トイレ（朝）

掃除をする佳介。

○住宅街（朝）

新聞紙を荷台に積んで、一生懸命、自
転車をこぐ美久。自転車が転ぶ。

○美久のアパート（夜）

机によりかかってノートの上に顔をの
せ、居眠りする美久。

○明和ビル・廊下

佳介が、掃除をしていると、サラリー
マンたちが、通りかかって言葉を吐き
かけていく。

サラリーマン「おい、お前の娘、専門学校に

行っただってな」

顔をしかめる佳介。

サラリーマン「それで、家出したんだって

え？」

サラリーマンたち、にやにや。

サラリーマン「やっぱり、中卒の娘はだめだ

なあ？」

サラリーマンたち、嘲笑しながら去っていく。

佳介、見送るが、作業服の帽子を床に叩きつける。

佳介「ちがう、……ちがう、美久は……頭がいいんだ」

佳介は、泣き崩れる。

○共栄クリエイティブスタジオ（朝）

T・8年後 美久 35歳

机のコンピュータに向かって、小金

井美久（35）が、コンピュータに文字を打ち込んでいる。

うしろから、森井卓(48)の声がする。

森井「おーい！小金井君！」

美久、振り返る。

美久「はい！」

森井「君、今度の小川賞に応募したんだって？」

美久、少々、照れながら、

美久「はい」

森井「受かったら、会社辞めるの？」

美久「いえ、そのつもりは」

森井「どう？受かったら、一杯」

と、言っ、森井、お猪口を飲むふりを
をする。

美久、はにかみながらも、

美久「考えておきます」

と、にっこり。

森井「あ、これ終わったら、内田先生のところ
に行っ、ね」

と、そこに、森井の机の電話が鳴って、

森井が受話器をとる。

森井「はい、共栄クリエイティブスタジオ、

代表森井です」

と、森井、メモ書きしながら、頷く。

○街なか・国道沿い

美久、歩いている。

様々な商店と、住宅が入り混じった街。

主婦や、親子連れが手をつなぎ、道を
行き交っている。

子供が、母親に話しかける。

子供「ねえ、父の日が近いよねえ？」

母親「そうね、お父さんに何か贈る？」

子供「うーんと、ね……」

母親と、子供は、笑顔で道を歩いてい
く。

車が、通り過ぎる。

美久、それを眺めながら、空を仰ぐ。

美久「父さん、働くって大変だね……」

美久の上に、街路樹が、葉を豊かにつ
け、風にそよいでいる。

スマホの着信音がして、美久は、持つ

ていた鞆の中から、スマホを取り出し、
着信元を確認し、首をかしげながら、

美久「……はい」

敦子の声「あ、美久？」

美久「母さん？」

敦子の声「よかった、携帯の番号はこのまま

ね。お父さんが……」

美久「……痴呆症？老人ホーム？」

車のクラクションが鳴る。

敦子の声「あなたが、お父さんと喧嘩をして
いることは、わかっているけど、一度戻っ
てきて」

美久「……だめよ、行けない」

敦子の声「美久……」

美久「このままじゃ、帰れない」

敦子の声「美久……、そうは、言っても」

美久「私、小説家になるまで、帰れない」

敦子の声「美久……」

美久「……」

敦子の声「記憶がなくなってからじゃ、手遅

れよ……」

美久「……」

敦子の電話の向こうで、玄関のほうからか、配達の声がする。

（小金井さん、シマゾンです）

敦子の声「……あ、じゃ、また」

と、言っただけで電話が切れる。

美久、呼吸が荒くなって、空を仰ぐ。

ヘリコプターが上空を飛んでいく。

それを、目で追いながら、美久、呼吸を整える。

近くの商店では、「父の日セール」というポップ文字が出ている。

美久、じーっとポップ文字を見つめている。

○ひまわりホーム・外観

鉄筋の中規模の老人ホーム。

雨が、降っている。

○同・小金井佳介の部屋

小金井佳介（75）が、ベッドに座り、窓から降る雨をじーっと見つめている。雨が、窓をしずくになって伝わり、どんどん流れていく。

廊下から、入居者たちの声がする。

入居者Aの家族の声「お父さん、父の日おめでとー」

佳介、少々寂しそうな表情で、外の雨模様をみつめている。

部屋の入口の戸が、ノックされ、介護士が入ってくる。

介護士「小金井さん、入りますよ？」

佳介「……」

介護士、構わずに部屋に入ってくる。

洗濯物を何枚か抱えている。

介護士「小金井さん、洗濯物置いていきます

ね」

佳介「……」

介護士、佳介に構わず、洗濯物をクロ

ーゼットに収納し始める。

作業をしながら、

介護士「小金井さん、今日は誰か、来るかもしれないですね」

と、にこにここと、話しかける。

介護士「娘さんも、来るかもしれないですね？」

佳介「……」

介護士、構わず、クローゼットを閉めて、黙っている佳介をちらりと見る。が、少し、溜息をついて、お辞儀をして部屋を出ていく。

佳介、黙って雨の庭を眺めつづける。

窓ガラスに雨粒が叩きつけられる。

廊下のほうから、入居者Aと、入居者

Aの子の会話がする。

入居者Aの家族の声「お父さん、こないだ、
哲ちゃんが歩き始めたのよ？」

入居者Aの声「(弱々しい声で)あ、歩き始めたの
かあー？」

その家族の声を聞きながら、佳介、一

筋の涙を流す。

脇のテーブルの引き出しから、美久の
高校入学のときの写真を取り出し、い
とおしそうに眺める。手で写真をなぞ
る。

写真の美久は、明るい笑顔で笑ってい
る。

写真を眺め、手に持ちながら、ゆっく
りと目を閉じ、眠る佳介。

枕もとに美久の写真。

雨が、しとしとと降っている。

○同・庭

雨がざあざあと降っている。

○同・玄関

入居者Aの家族が帰っていく。

玄関を出ようとしている。

入居者A、手を振って見送る。

入居者Aの家族「バイバイ。また来るねー」

頷きながら。手を振る入居者A。

○同・庭

雨が降り続ける。

カタツムリがゆっくりと庭木の葉の上を這っている。

○同・佳介の部屋

佳介の枕元に美久の写真。

眠っている佳介。

○同・玄関・受付

美久が、傘をたたんで玄関から入ってくる。

受付の事務員にぺこりとお辞儀をする。

美久「こんにちは、小金井佳介の家族の者です」

事務員「まあ、小金井さんの。娘さんですか？」

美久「はい」

事務員「いつも、佳介さん、娘さんの話ばかり

りしてたんですよ？」

美久、小さく頷く。

事務員「入ってください、その角を曲がった、

106号室です」

美久、お辞儀をして、入っていく。

○同・佳介の部屋

ベッドに横になって眠っている、佳介。

枕もとに美久の写真。

ノックをしても、佳介は目覚めない。

美久が、そろりと入ってくる。

美久「……お父さん？」

美久は、そっと足音を立てないようにして、佳介に近づく。

佳介、まだ、眠っている。

枕もとの写真に目を落とし、はっとする美久。

佳介を覗き込む美久。

佳介「……」

佳介、ゆっくりと目を開き、美久に気

が付く。

佳介「……」

佳介、最初、なにが起きたか分からないような顔をしているが、やがて信じられないような顔。

美久「お父さん、私よ？」

佳介「……美久か」

佳介、体を起こそうとして、少し動く。

助けおこす美久。

美久「お父さん、わかる？」

佳介「……」

雨がざあざあと降っている。

美久、少々泣き顔になって、

美久「お父さん、ごめんね」

佳介「……」

美久「長い間、会いに来なくてごめんなさい。

意地になってた」

佳介「……」

美久「小説家になって、お父さんに会いに行こうと思ったの」

佳介「……」

美久「私、……」

美久、泣き顔。

佳介、空をみつめてぼうつとしているが、やがて口を開く。

美久「……会いに来てくれたんだな？」

美久、すすり泣く。

美久「やっと、お父さんの気持ちが変わった。仕事って大変」

美久は、やっと微笑む。

佳介も苦笑する。

ただ、手を握って頷き合う佳介と美久。

○同・同

入口から、花瓶に水を入れて、美久が

入ってくる。笑顔。

美久「お父さん、水、入れてきたわ」

佳介、頷く。

美久「今度、小川賞に応募する。ずっと応募し続けてるんだけど、なかなか難しい」

佳介、笑顔で頷く。

美久「お父さん、反対しないの？」

佳介「子供の名誉を喜ばない親はないだろ？」

美久、一呼吸おいて、にっこりと笑う。

美久は、自分の目元を指で拭いながら、

美久「……お父さんに応援されることが、本

当が一番うれしいの」

佳介、かすかに微笑みながら、

佳介「どんな話だ？」

美久「面白い話よ。小さい頃、お父さんにも

ネタ帳で、見せたね」

佳介「ネタ帳？」

美久、頷いて、

美久「これよ？」

と、手もとの鞆を引き寄せる。

中から、青い手帳を取り出し、そのな

かの1ページを開き、佳介の前に広げ

て見せる。

何か、文字が殴り書きでびっしり書い

てある。

（匠のえだ、匠の技？）など、多数。

佳介「ああ、これか」

美久「思い出せる？」

佳介、激しく何度も頷く。

と、部屋の外の廊下の向こうから、

事務員の声がある。

事務員の声「小金井さん、奥さんが来られ

たわよ！」

美久、笑顔で、

美久「お母さんだわ！ちよっと、行ってくる！」

美久、佳介に笑いかけて、笑顔で部屋

を出ていく。

青い手帳を残して。

○同・同

美久と、小金井敦子（コニ）が、入ってくる。

敦子、とても嬉しそうにニコニコと、

美久と佳介のほうを交互に見ながら、

敦子「ケイちゃん、美久、来てくれたのね」

敦子、美久のほうへ向かって、

敦子「美久、よく来てくれたわね」

敦子、佳介のほうへ駆け寄り、

敦子「ケイちゃん、よかったわね」

と、佳介の手を握って喜ぶ。

○同・庭から窓を経て、佳介の部屋を臨んで

佳介、敦子、美久、三人で和菓子を食べ

べている。みんな笑顔。

笑いながら、楽しそうに話している。

佳介のとても楽しそうな笑顔。

○同・佳介の部屋・中

壁の時計を見上げる美久。

三時半近くを指している。

美久「あ、もう、こんな時間」

敦子「もう、行っちゃうの？」

美久「うん、もう、行かなきゃ。小説の最後

の仕上げ」

佳介の寂しそうな顔。

美久「それから、洗濯物も出さなきゃ。セー
ターまだ、ぜんぜん出してないの」

と、おどけて舌をぺろりと出す。

敦子「なに、美久ったら」

と、敦子笑う。

身支度する美久。

美久に気を取られる敦子。

ふと、佳介が、脇のテーブルを見ると、

青い手帳が、置きっぱなし。

敦子「また、来てね……」

美久「今度は、いつになるか分からないわ」

佳介、手探りで、手帳に手を伸ばし、

青い手帳を隠してしまう。

美久、佳介のほうへ振り向く。

佳介、あわてて知らんふり。

美久は、気づかない。

美久「お父さん、じゃ、ごめんね、またね」

佳介、苦勞して笑顔を作って、美久に

手を振る。

部屋を出ていこうとする美久。

再び、振り返って、

美久「お父さん……」

と、笑顔を作ってドアを出ようとする。

敦子「あ、待って、見送るわ」

敦子と、美久、部屋を出ていく。

出ていった二人を見送って、佳介、再び青い手帳を手に取り、じっとそれを見つめる。

○共栄クリエイティブスタジオ・オフィス

机のコンピュータに向かって、何か打ち込んでいる美久。

ふと、何かアイデアが浮かんだように宙を見上げ、ちよっと頷くと、足もとの鞆を引き寄せ、中を探る。

美久「ない、ない」

森井「え？美久ちゃん、何がないの？」

美久「ネタ帳が、ない」

（ザーッ）という雨の音。

○街なか

雨が降っている。

○ひまわりホーム・佳介の部屋

窓の外を雨が降っている。

佳介が、ベッドに座って物思いにふけ
っている。

ふと、机の引き出しを開けて、青い手
帳を取り出す。

愛おしそうに中を見る佳介。

ノックの音がし、洗濯物を持って介護
士が入ってくる。

慌てて机の引き出しに青い手帳を隠す

佳介。

佳介「なんだ、介護士さんか」

介護士、笑って、

介護士「何、隠したんです？」

佳介、苦笑。

佳介、机の中の引き出しを、すつと開
けて、

佳介「美久の。手帳なんだ」

介護士、洗濯物をクローゼットに押し
込みながら、

介護士「お嬢さんの、ですか？」..

佳介「これが、あれば、また会える気がして」

介護士「大事なものなんですか？」

佳介「ああ...」

佳介、少し表情が曇る。

× × ×

介護士、手仕事を終えて、部屋をお辞
儀をして出ていく。

残された佳介、寂しそう。

○アパート・美久の部屋（夜）

美久が、一生懸命に机に向かって、パ
ソコンを打っている。

画面は、ワードの小説。

手もとにコーヒーカップ。

コーヒーカップを口に含む。

○同・同（夜）

机に突っ伏して眠ってしまったっている美久。

○街なか

美久が、雑誌を手に持ちながら、息せき切って走っている。

○ひまわりホーム・佳介の部屋

ベッドに佳介が座って、手に青い手帳を持ち、中身を眺めている。

扉を乱暴に開け、美久が入ってくる。

美久「お父さん！」

びっくりする佳介。

手にしていた青い手帳を隠す。

美久、気づかずに、

美久「お父さん！小説、最終選考に残ったよ！」

佳介「……？」

美久「お父さん……私の小説が、賞を受けそうなの！プロになれるかもしれないのよ！」

佳介「……あ、……」

佳介は、口をぱくぱく。

美久「やっど、……やっど、……」

佳介は、じっと見ている。

美久「お父さん、ありがとう！」

美久、佳介に抱きつく。

佳介「……」

美久「お父さんが、昔、字を覚えてくれたおかげよ！」

佳介、感極まって何度も頷く。

美久、佳介の手をとる。

佳介、涙ぐんでいる。

佳介「……美久、美久、お前には、悪いことをした」

美久「ううん、ううん、お父さん、どうでもいいの」

と、美久、首を振る。

佳介の手を握り、泣き続ける美久。

○同・同

入口から、花瓶を持って、入ってくる

美久。笑顔になっている。

美久「お父さん」

佳介は、嬉しそうに微笑むが、すこし表情が曇っている。

美久が、佳介の傍らに來ると、途端に鳴るスマホ。

美久、スマホに出る。

美久「はい、……はい、すぐ戻ります」
鞆に手をかける美久。

美久「ごめん、お父さん、帰らないと……」

美久は、悲しそうな顔をする。

佳介も、悲しそうに、

佳介「美久……」

身支度する美久。

美久「じゃ、ごめん」

出ていこうとする、美久。

佳介が、美久の服の裾を引っ張る。

美久、振り返り、

美久「……」

佳介「……」

美久「ごめんね、お父さん、もう、行かない

と……」

佳介「……お前に、謝らなきゃならないことがある」

美久「いいのよ」

佳介「違うんだ」

佳介、震える手で、机のほうを手探りする。引き出しを開け、青い手帳を取り出す。

佳介「この間、これを……これを、盗んだ」

美久、目を見張る。

佳介「これが、これがあつたら、美久に、また、会えるような気がして……」

目を見張る美久。

佳介「これが、あれば、これが、あれば、……」

感極まり、むせこむ佳介。

美久「（震える声で）お父さん……」

許しを乞うような目で見つめる佳介。

美久「これを……、お父さんが、持ってたの？」

何度も、頷く佳介。

美久、思わず、佳介の両手を握りしめる。
る。

佳介「……、ごめん、ごめん……」

○T・何日かあと

○共栄クリエイティブスタジオ・オフィス

美久が、机のパソコンに向かって、ひたすら文字を打ち続けている。

電話に出たり、他の社員たちが、室内を行き来したりしている。

森井「小金井くん！」

美久、森井のほうを見る。

森井「ごめん、さっきおうちから伝言があっ

たそうだ。お父さんが……」

美久「え？父が？」

森井「こないだ、君が行ってから、食事を摂

らなくなったそうさ。もう、1週間」

美久「え？」

○ざーっと鳩たちが飛び立つシーン

○公園の脇の道

鳩たちが飛んでいく。

公園の脇道を、美久が走って行く。

森井の声「お父さんが、食事を摂らなくなつたそうだが、こないだ、美久ちゃんが行つてから……。『もう、自分の役割は果たせたから』って。……長くないだろうから、家族の人に知らせてほしい、と、言われたそうさ……」

必死に走り続ける美久。角を曲がり、

老人ホームに駆け込んでいく。

○ひまわり老人ホーム・玄関

玄関に駆け込み、急いで受付を済ませる美久。

○同・佳介の部屋

ころがり駆け込んでくる美久。

美久「お父さん！」

やせ細って、ベッドに横たわっている

佳介。

美久に気がつく佳介。

佳介「あ……」

佳介、震える手を美久のほうへ伸ばす。

美久「お父さん……」

立ち尽くす美久。

微笑する佳介。

美久「私、お父さんのことが、大好きだから！」

佳介、息が静かになり、息絶える。

○小川賞受賞会場

会場の壇上に、「令和3年度小川賞式」

という幕があり、数人の男女が座って

いる。

その中で、椅子に腰かける美久。

進行役「令和3年度、小川賞、優秀賞の受賞

は……」

緊張する、壇上の面々。

進行役「小金井美久さん！」

スポットライトが、美久を照らし、思
いがけない、というような表情を見せ
る美久。

ゆっくりと、立ち上がり、お辞儀をす
る。

おわり